

学校いじめ防止基本方針

貝塚市立第一中学校
平成29年4月14日

第1章 いじめ防止に関する本校の考え方

1 基本理念

いじめは、その子どもの将来にわたって内面を深く傷つけるものであり、子どもの健全な成長に影響を及ぼす、まさに人権に関わる重大な問題である。全教職員が、いじめはもちろん、いじめをはやし立てたり、傍観したりする行為も絶対に許さない姿勢で、どんな些細なことでも必ず親身になって相談に応じることが大切である。そのことが、いじめ事象の発生・深刻化を防ぎ、いじめを許さない生徒の意識を育成することになる。

そのためには、学校として教育活動の全てにおいて生命や人権を大切にする精神を貫くことや、教職員自身が、生徒を一人ひとり多様な個性を持つかけがえのない存在として尊重し、生徒の人格のすこやかな発達を支援するという生徒観、指導観に立ち指導を徹底することが重要となる。

本校では、『責任、忍耐、友愛』という校訓の持つ精神を培い、知力・心・体力のバランスのとれた生徒を育成する。」を教育目標としており、そのために人権教育に重点をおいて取り組んでいる。いじめは重大な人権侵害事象であるという認識のもとに、ここに学校いじめ防止基本方針を定める。

2 いじめの定義

「いじめ」とは、生徒に対して、一定の人的関係にある他の生徒が行う心理的又は物理的な影響を継続的に与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった生徒が心身の苦痛を感じているものをいう。

具体的ないじめの態様は、以下のようなものがある。

- ・冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。
- ・仲間はずれ、集団による無視をされる。
- ・軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。
- ・ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする。
- ・金品をたかられる。
- ・金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。
- ・嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。
- ・パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる等

3 いじめ防止のための組織

(1) 名称

「子ども支援対策委員会」（いじめ・不登校・虐待対応を含む）

(2) 構成員

校長、教頭、教務主任、首席、生徒指導主事、子ども支援コーディネーター、子ども支援担当者、各学年担当、養護教諭、（スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー）

(3) 役割

- ア 学校いじめ防止基本方針の策定
- イ いじめの未然防止
- ウ いじめの対応
- エ 教職員の資質向上のための校内研修
- オ 年間計画の企画と実施
- カ 年間計画進捗のチェック
- キ 各取組の有効性の検証
- ク 学校いじめ防止基本方針の見直し

4 年間計画

本基本方針に沿って、以下のとおり実施する。

貝塚市立第一中学校 いじめ防止年間計画				
	1年	2年	3年	学校全体
4月	保護者への相談窓口周知 生徒への相談窓口周知	保護者への相談窓口周知 生徒への相談窓口周知	保護者への相談窓口周知 生徒への相談窓口周知	第1回 いじめ対策委員会 (年間計画の確認、問題行動 調査結果を共有) 「学校いじめ防止基本方針」 のHP更新 PTA総会で「学校いじめ防 止基本方針」の趣旨説明
	生活支援カードによって 把握された生徒状況の集 約	人権HR(いじめを考え る)	人権HR(いじめをなく すために)	
5月	家庭訪問週間 (家庭での様子の把握)	家庭訪問週間 (家庭での様子の把握)	家庭訪問週間 (家庭での様子の把握)	教育相談週間
	宿泊学習(コミュニケー ション能力の育成)	職場体験(社会性の育成)		
6月	教育相談	教育相談	教育相談	1学期いじめ状況調査 第2回委員会(進捗確認)
7月	保護者懇談週間 (家庭での様子の把握)	保護者懇談週間 (家庭での様子の把握)	保護者懇談週間 (家庭での様子の把握)	
9月	いじめアンケートの実施 アンケート「社会性測定 用尺度アンケート」実施 体育大会	いじめアンケートに実施 アンケート「社会性測定 用尺度アンケート」実施 体育大会	いじめアンケートの実施 アンケート「社会性測定 用尺度アンケート」実施 体育大会	
10月	教育相談	教育相談	教育相談	教育相談週間
11月	アンケート「社会性測定 用尺度アンケート」実施	アンケート「社会性測定 用尺度アンケート」実施	アンケート「社会性測定 用尺度アンケート」実施	
12月	保護者懇談週間 (家庭での様子の把握) いじめアンケートの実施	保護者懇談週間 (家庭での様子の把握) いじめアンケートの実施	保護者懇談週間 (家庭での様子の把握) いじめアンケートの実施	第3回委員会(状況報告と取 組みの検証)
1月				2学期いじめ状況調査
2月	社会性測定用尺度アンケ ート	社会性測定用尺度アンケ ート	社会性測定用尺度アンケ ート	
3月	いじめアンケートの実施	いじめアンケートの実施	いじめアンケートの実施	第4回委員会(年間の取組み の検証)
				3学期いじめ状況調査

(学校行事等により取り組みが前後することもある)

5 取組状況の把握と検証（PDCA）

子ども支援対策委員会は、毎週検討会議を開催し、取組みが計画どおりに進んでいるか、いじめの対処がうまくいかなかったケースの検証、必要に応じた学校基本方針や計画の見直しなどは年4回行う。

第2章 いじめ防止

1 基本的な考え方

いじめの未然防止にあたっては、教育・学習の場である学校・学級自体が、人権尊重が徹底し、人権尊重の精神がみなぎっている環境であることが求められる。そのことを基盤として、人権に関する知的理解及び人権感覚を育む学習活動を各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じ、総合的に推進する必要がある。

特に、生徒が、他者の痛みや感情を共感的に受容するための想像力や感受性を身につけ、対等で豊かな人間関係を築くための具体的なプログラムを作成する必要がある。そして、その取組みの中で、当事者同士の信頼ある人間関係づくりや人権を尊重した集団としての質を高めていくことが必要である。

2 いじめの防止のための措置

(1) 平素からいじめについての共通理解を図るため、教職員に対して生徒の様子や行動の交流を教職員間で活発に行うように促す。また、教育相談に限らず生徒の話を聴く機会を多く持つように促す。

生徒に対しては、教職員を始め保護者、周囲の大人に困ったことを伝えることの大切さを意識づけていく。

(2) いじめに向かわない態度・能力を育成するために、自他の存在を認め合い、尊重し合える態度を養うことや、生徒が円滑に他者とコミュニケーションを図る能力を育てることが必要である。

そのために、学級の活動においてや授業において他者とコミュニケーションを取ることができる場を積極的に持つように工夫する。

(3) いじめが生まれる背景を踏まえ、指導上の注意として、いじめを助長するような教職員の不適切な言動等、指導の在り方に注意を払うよう、機会を設けてチェックする。

(4) 社会性測定用尺度アンケートの検証を行い、自己有用感や自己肯定感を育む取組みとして、学校行事に力を入れていく。学校行事への学級の取り組みを通して、個々の自己有用感をはぐくむようにする。

(5) 生徒が自らいじめについて学び、取り組む方法として、道徳や学級活動において機会を設けるようにする。

(6) 携帯電話の使用についてなど、情報リテラシーをはぐくむ授業や取り組みを全学年通じて行い、携帯電話やインターネットを使用しているいじめの防止を図る。

第3章 早期発見

1 基本的な考え方

いじめの特性として、いじめにあっている生徒がいじめを認めることを恥ずかしい

と考えたり、いじめの増幅を恐れるあまり訴えることができないことが多い。また、自分の思いをうまく伝えたり、訴えたりすることが難しいなどの状況にある生徒が、いじめにあっている場合は、隠匿性が高くなり、いじめが長期化、深刻化することがある。

それゆえ、教職員には、何気ない言動の中に心の訴えを感じ取る鋭い感性、隠れているいじめの構図に気づく深い洞察力、よりよい集団にしていこうとする熱い行動力が求められている。

2 いじめの早期発見のための措置

(1) 実態把握の方法として、定期的なアンケートを全学期に実施する。また、定期的な教育相談も1学期、2学期に行う。日常的な観察も行い、学年部会等を通し生徒の行動についての情報交換は多く行う。

(2) 保護者と連携して生徒を見守るため、1学期の家庭訪問の際に生徒の家庭での様子をよく聞き、気になること、様子がおかしい時などは連絡を密にできるよう確認し、保護者との連携を確かなものとする。

(3) P T A総会などにより、相談体制を広く周知する。

また、子ども支援対策委員会により、適切に機能しているかなど、定期的に体制を点検する。

(4) 教育相談等で得た生徒の個人情報については、その対外的な取扱いについて慎重に扱いながら、必要な情報については学年部会、子ども支援対策委員会を通して情報の共有を図る。

第4章 いじめに対する措置・対応

1 基本的な考え方

いじめにあった生徒のケアが最も重要であるのは当然であるが、いじめ行為に及んだ生徒の原因・背景を把握し指導に当たることが、再発防止に大切なことである。近年の事象を見ると、いじめた生徒自身が深刻な課題を有している場合が多く、相手の痛みを感じたり、行為の悪質さを自覚することが困難な状況にある場合がある。よって、いじめた当事者が自分の行為の重大さを認識し、心から悔い、相手に謝罪する気持ちに至るような継続的な指導が必要である。いじめを受けた当事者は、仲間からの励ましや教職員や保護者等の支援、そして何より相手の自己変革する姿に、人間的信頼回復のきっかけをつかむことができると考える。

そのような、事象に関係した生徒同士が、豊かな人間関係の再構築をする営みを通じて、事象の教訓化を行い教育課題へと高めることが大切である。

2 いじめ発見・通報を受けたときの対応

(1) いじめの疑いがある場合、ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階から的確に関わる。

遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止めたり、生徒や保護者から「いじめではないか」との相談や訴えがあった場合には、真摯に傾聴する。

その際、いじめられた生徒やいじめを知らせてきた生徒の安全を確保するよう配慮する。

- (2) 教職員は一人で抱え込まず、速やかに学年主任や生徒指導主事、子ども支援コーディネーターに報告し、いじめの防止等の対策のための組織（子ども支援対策委員会）と情報を共有する。その後は、当該組織が中心となって、速やかに関係生徒から事情を聴き取るなどして、いじめの事実の有無の確認を行う。学年主任や子ども支援コーディネーターが不在の場合は管理職に直接報告する。
- (3) 事実確認の結果、いじめが認知された場合、管理職が教育委員会に報告し、相談する。
- (4) 被害・加害の保護者への連絡については、家庭訪問等により直接会って、より丁寧に行う。
- (5) いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものと認められるときは、いじめられている生徒を徹底して守り通すという観点から、所轄警察署と相談し、対応方針を検討する。

なお、生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに所轄警察署に相談し、適切に援助を求める。

3 いじめられた生徒又はその保護者への支援

- (1) いじめた生徒の別室指導や自宅待機などにより、いじめられた生徒が落ち着いて教育を受けられる環境を確保し、いじめられた生徒に寄り添い支える体制をつくる。その際、いじめられた生徒にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携し、子ども支援対策委員会が中心となって対応する。状況に応じて、スクールカウンセラーの協力を得て対応を行う。

4 いじめた生徒への指導又はその保護者への助言

- (1) 速やかにいじめを止めさせた上で、いじめたとされる生徒からも事実関係の聴取を行う。

いじめに関わったとされる生徒からの聴取にあたっては、個別に行うなどの配慮をする。

- (2) 事実関係を聴取した後は、迅速にいじめた生徒の保護者と連携し、協力を求めるとともに、継続的な助言を行う。
- (3) いじめた生徒への指導にあたっては、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。なお、いじめた生徒が抱える問題など、いじめの背景にも目を向け、当該生徒の安心・安全、健全な人格の発達に配慮する。

その指導にあたり、学校は、複数の教職員が連携し、必要に応じてスクールカウンセラーの協力を得て、組織的に、いじめをやめさせ、その再発を防止する措置をとる。

5 いじめが起きた集団への働きかけ

- (1) いじめを見ていたり、同調していたりした生徒に対しても、自分の問題として捉えさせる。

そのため、まず、いじめに関わった生徒に対しては、正確に事実を確認するとともに、いじめを受けた者の立場になって、そのつらさや悔しさについて考えさせ、相手の心の悩みへの共感性を育てることを通じて、行動の変容につなげる。

また、同調していたりはやし立てたりしていた「観衆」、見て見ぬふりをしていた「傍観者」として行動していた生徒に対しても、そうした行為がいじめを受けている生徒にとっては、いじめによる苦痛だけでなく、孤独感・孤立感を強める存在であることを理解させるようにする。

「観衆」や「傍観者」の生徒は、いつ自分が被害を受けるかもしれないという不安を持っていることが考えられることから、すべての教職員が「いじめは絶対に許さない」「いじめを見聞きしたら、必ず先生に知らせることがいじめをなくすことにつながる」ということを生徒に徹底して伝える。

- (2) いじめが認知された際、被害・加害の生徒たちだけの問題とせず、学校の課題として解決を図る。全ての生徒が、互いを尊重し、認め合う集団づくりを進めるため、担任が中心となって生徒一人ひとりの大切さを自覚して学級経営するとともに、すべての教職員が支援し、生徒が他者と関わる中で、自らのよさを発揮しながら学校生活を安心してすごせるよう努める。

そのため、認知されたいじめ事象について地域や家庭等の背景を理解し、学校における人権教育の課題とつなげることにより教訓化するとともに、いじめに関わった生徒の指導を通して、その背景や課題を分析し、これまでの生徒への対応のあり方を見直す。その上で、人権尊重の観点に立ち、授業や学級活動を活用し、生徒のエンパワメントを図る。その際、スクールカウンセラーとも連携する。

体育大会や文化発表会等の学校行事は生徒が、人間関係づくりを学ぶ絶好の機会ととらえ、生徒が、意見の異なる他者とも良好な人間関係を作っていくことができるよう適切に支援する。

6 ネット上のいじめへの対応

- (1) ネット上の不適切な書き込み等があった場合、まず学校として、問題の箇所を確認し、掲示板等のURLを控え、その箇所を印刷・保存するとともに、いじめ対策委員会において対応を協議し、関係生徒からの聞き取り等の調査、生徒が被害にあった場合のケア等必要な措置を講ずる。

掲示板等への誹謗・中傷等の対応については、書き込みの保存と確認を行い、事実と確認された場合、関係機関と連携し、その処置を適切に行うよう努力する。

- (2) メール、ライン等によるいじめについて、事実関係を確認し、メール、ラインの保存を行い、指導していくとともに必要がある場合、関係機関に協力を求めていく。
- (3) 情報モラル教育の推進については、各学年において視聴覚資料をもとに学習する機会を設ける。